弘前城石垣の歴史

1.築城期の石垣

弘前城は、弘前藩初代藩主・津軽為信により築城が計画され、二代藩主・信枚が、慶長16年(1611)に完成させました。築城当初は、本丸南西隅に五層の天守が造られたと伝わっていますが、寛永4年(1627)に落雷のため焼失してしまいました。その翌年、地名を「高岡」から「弘前」に改めたとされています。

慶長16年の築城時には、本丸東側の中央部70mほどの範囲には内濠水面辺りまでの石が積まれ、それより上は土留めとなっていたとされます。現在でも、東側石垣の内濠水面付近には自然石が使われています。本丸の桝形にある「亀石」などの巨石を用いた石垣も、信枚により築かれたものです。

石材は、城の近くの石森(現在の「弘前市りんご公園」付近とされる)や岩木山麓の兼平で採取されたようです。

初代藩主・津軽為信

二代藩主・津軽信枚

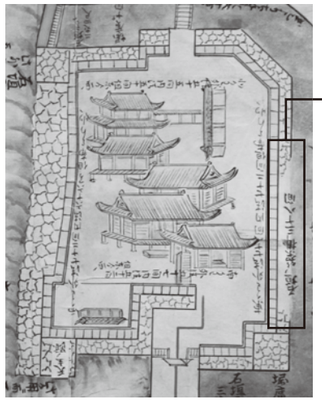
2. 元禄の石垣築き足し

弘前城本丸東側石垣について、右に示した江戸時代の絵図には、一部石垣の積まれていない状態が描かれ、その横に「石垣ノ築掛三十八間」と記されています。(「三十八間」は約70m)

この部分の石垣は、四代藩主・信政によって築かれました。信政による石垣築き足しは、元禄7年(1694)に開始され、大飢饉による工事の中断がありますが、元禄12年(1699)に完成しています。築城から約80年の時を経て、ようやく石垣で本丸を囲んだのです。信政が築き足した石垣は、石垣中央部の四角い切石で造られている部分です。

石材は、岩木山麓の如来瀬などから牛車やソリを使って運ばれたと記録に残っています。

四代藩主・津軽信政

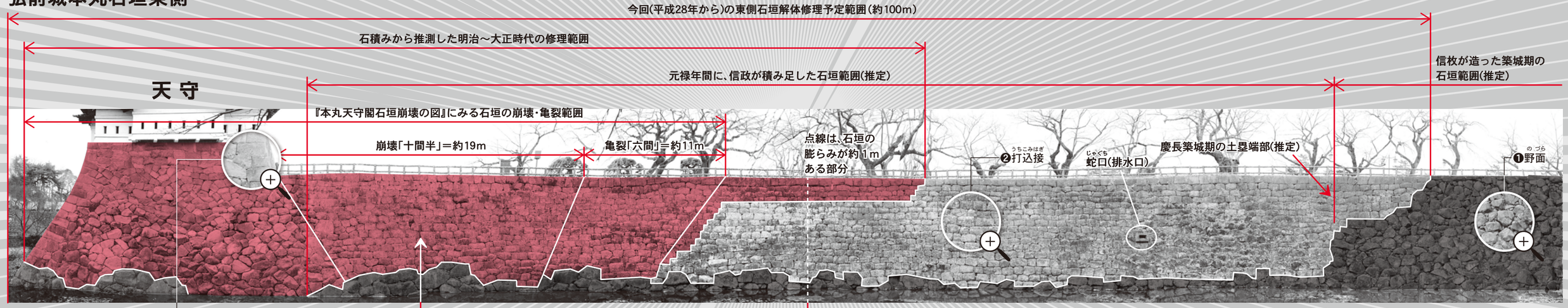


津軽弘前城之絵図
(本丸部分)17世紀半ば
弘前市立博物館所蔵

築城時に石垣が築かれなかった部分

※藩主画像／津軽歴代藩主絵像(正伝寺蔵・明治末年頃)

弘前城本丸石垣東側

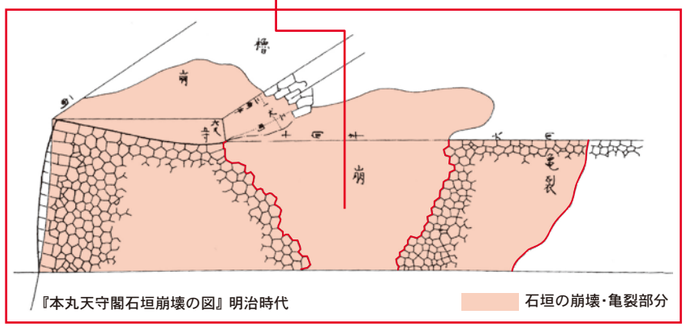


明治から大正時代の修理範囲(推定)　元禄年間に、信政が積み足した石垣(推定)　信枚が造った築城期の石垣(推定)

※オレンジ色と薄いグレー色の部分が、今回(平成28年から)の主な石垣解体修理予定範囲です。

明治～大正期の石垣修理

四代藩主・信政が本丸東側石垣を完成させてから200年経った明治時代中頃、天守の下の石垣が大きく崩壊。明治30年(1897)、天守を崩壊から守るために本丸の内側へ曳屋工事をしました。工事をしたのは、弘前市出身の大工棟梁・堀江佐吉です。この石垣修理は最終的に大正4年(1915)に完了しました。



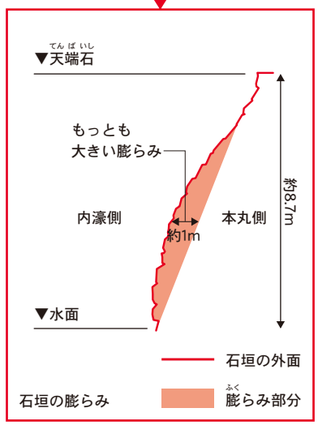
『本丸天守閣石垣崩壊の図』明治時代　石垣の崩壊・亀裂部分

明治～大正期の天守曳屋・石垣修理の様子

平成の石垣修理に至るまで

昭和58年(1983)5月の日本海中部地震後、石垣が膨らんでるのではないかという指摘を受け調査した結果、膨らみが大きく、このまま放置すると地震などにより石垣崩壊が起こることが分かりました。今回の石垣修理は、明治～大正の修理から約100年ぶりの、天守曳屋を伴う修理になります。

石垣の膨らみが大きい部分の断面図



石垣一口メモ

石材の加工度合や積み方の違いを見分けると、石垣を見る楽しみとなります。

❶野面／自然石、もしくはあまり加工していない割石
❷打込接／荒加工した割石
❸切込接／入念に精加工した切石

「野面積」は一見乱雑で不安定に見えますが、実は水はけも良く、地震にも強い。約400年を経た築城期の石垣はまだまだ健全で、平成の石垣修理の必要はありません。

積み方については、この他横目地が通らない不規則な「乱積」、横目地を通す「布積」、また隅の強度を高めるため直方体の石を交互に組み合わせる「算木積」などがあります。